ぽけっとすとーりー　～小さな国の、小さな小さな物語～

　リオルが、自分自身を縛っている糸の正体に気がついたのは、雁字搦めになってすぐの事だった。と言っても、自分の力で気がついたわけでは無い。

「イ……イトマルの糸……いつの間にっ？」

　という、主人の声が聞こえたからである。リオルは、少しみっともない感じの大の字で拘束されてしまった。

「……最初にイトマルが倒れた後」

　そう呟いて、神楽は河原の方を指差した。

「僕達はこっちまで戦いながらやってきたよね。その時、ニューラが引っ張って来たんだ」

　近くの木に指を滑らし、続ける。

「ゼニガメやヒトカゲと戦いながら、隙を見て適当な木に糸をつけて網みたいにしようと思ったんだけど……流石は雅也のポケモン。そんなに上手くはいかなかったよ」

　苦笑しながら、神楽は頭を掻く。本当は網のように糸を張り巡らせる予定だったのだが、今リオルを拘束しているのは、あくまでも『糸の集まり』だった。到底『網』と呼べる代物では無い。そんな物でも、出来上がったのは、ニューラがリオルに倒されるほんの少し前だった。まぁ少しでも気が緩めば、途端にやられてしまう気配を神楽達は感じていたので、こんな出来でも無理は無い。

　ちなみに神楽の予定では、もう少し余裕を持ってリオルをあの糸に貼り付けるはずだったのだが……今リオルを拘束できているのは、はっきり言って事故みたいなものである。リオルを適当な方向に蹴り飛ばしたら、たまたまあの糸があった、というだけだ。別段、ワカシャモが狙ってやったことではない。

「予定とはちょっと違うけど……なにはともあれ、イトマルの糸で絡め取ってしまえばこっちのものだ！　今のリオルに、ワカシャモの攻撃を躱すことは出来ない！　いけ、ワカシャモ！」

　既に、ワカシャモは地面を蹴って、空高く飛び跳ねていた。今、リオルの目には、月の光をバックに垂直に落ちてくるワカシャモの姿が写っている。どうやら、ダメージによって下がった蹴りの威力を、重力で補う魂胆らしい。神楽もワカシャモも、中途半端な一撃では、リオルを気絶させられないと感じていた。千載一遇のチャンス。下手な攻撃で、リオルを絡め取っている糸が切れでもしたら、攻撃をクリーンヒットさせる機会は、恐らくもう無い。彼等は、そう思っていたのだ。

「君達は強かった。能力も、戦術も。でも、これで終わりだ！　ワカシャモ、二度蹴り！」

　神楽の声が森の中に響く。月の光が、まるで勝者がワカシャモであるかのように、スポットライトを当てている。

　雅也は、素直に神楽の作戦に感心していた。例え予定とは違ったのだとしても、戦っている自分達には関係のないことで、大切なのは結果だと雅也は思っていた。現に、こうして雅也達は追い詰められている。過程はどうであれ、神楽達の『リオルの動きを封じる』という作戦は、見事に成功しているのだから。このままワカシャモの攻撃を受けたら、リオルは間違いなく倒されるという確信が、雅也にはあった。

　そして何より、神楽のポケモン達のコンビネーションに、雅也は感服していた。先に倒れたイトマルが残した糸を、ニューラがここまで持ってきて、そしてワカシャモが相手を仕掛けに嵌める。誰が欠けても、成功しなかった作戦だ。自分達の置かれているこの状況は、ワカシャモ一匹で作り出された物ではなく、イトマル、ニューラ、ワカシャモの三匹が作り出したものであることを、雅也は重々理解していた。きっと、神楽は最初からこの作戦を考えていたのだろう。それを実行するとは、実に見事なチームプレーである。

　恐らく今の雅也達では、このようなコンビネーションは出来ない。それは本人達が一番良く理解していた。付き合いの長いピカチュウとリオルですら、神楽達の域には達せていないのだ。精々、小手先のコンビネーションもどきがやっとである。

　この一瞬だけ見れば、神楽の勝利は疑いようもない。にも関わらず、雅也は笑っていた。

　圧倒的に不利なこの局面で、ヤケを起こしたのか？

　否。この時の彼の顔は、諦めてしまった時のような、だらしのないものではなかった。

　勝てる、と、本気でそう思っている顔だ。

　この状況の、どこから勝てる可能性を見出したのか。

　それは、雅也の目の先に写っている光景を見れば分かる。

「……なん……で？」

　神楽が、今にも消え入りそうな声で呟いた。今自分自身が見ている物を、神楽は信じることが出来なかったから。

　眩い光が、リオルを包んでいた。その光は、月光さえ霞むほどの眩さだったが、その光に思わず目を瞑ってしまったのはワカシャモただ一匹だけだ。まるで、ここだけ昼になってしまったかのような輝きだ。雅也も神楽も、その光から目を逸らすことが出来なかった。

　確かに素晴らしいコンビネーションだったが、雅也もそれに負けないだけの物が、自分やリオルにもあると知っていた。幼い頃より一緒にいたからこそ出来た、絶対的な信頼。それだけは、他の誰よりも、例え神楽が相手でも負けないと、彼等は信じていた。

　今、リオルの心臓は、ドクンドクンと波打っている。頭の先から尻尾の先、足の指先まで、いたるところが温かい何かで包まれているような、そんな感覚がリオルにはあった。

　リオルの目に映るワカシャモ――の後ろの月。その光が、今リオルの目を貫いていた。

　目を瞑ったワカシャモも、すぐに閉じた目をカッと見開く。二人も食い入るように見入っていた。この先は、瞬きさえも許されないと、この場にいる全員が本能的に感じ取ったからだ。

　これは、進化の光。

　光に包まれたリオルの体が、みるみるうちに大きくなっていく。倍……とまではいかないが、ほとんど倍に近い。体に巻きつく糸は、大きくなる体によって切れたりこそしなかったものの、それでも苦しそうな悲鳴をあげているかのような音をたてていた。

　そんな中でも、蹴りを決めようとするワカシャモの落下は止まらない。この光が輝きを失う前に、なんとしても攻撃を決めたいというのは山々なワカシャモだが、こればっかりはどうしようも無い。出来るのは、蹴りを繰り出すタイミングを測ることだけだ。加速していくスピードだが、それでもまだ遅いと、ワカシャモは感じていた。

　そして、蹴りの一撃が届くまで後三十センチというところで、リオルを包み込んでいた光は弾け飛ぶ。それに再び目を瞑りかけたワカシャモだが、何とかグッと堪えた。そして、その眼にある光景が映る。

　まだ、イトマルの糸はリオル……いや、ルカリオを雁字搦めにしていた。後数分も持たなそうだが、相変わらずルカリオを大の字で拘束している。その事実が、ワカシャモの意識を尖らせた。今ワカシャモに見えているのは、己と攻撃対象であるルカリオの土手っ腹だけ。それ以外のものは、今のワカシャモには見えていない。

「し……進化したとしても、この攻撃は避けられない！　いけ、ワカシャモ！」

　という主人の声すら、今のワカシャモには聞こえていなかった。

　だが、後攻撃が届くまで数センチというところで聞こえてきた雅也の声は、そんなワカシャモの耳に届く。

「それはどうかな、神楽」

　刹那、ルカリオの胸の前に、オレンジ色の光が集まっていく。不意に、自分の攻撃の意識が、その光へと吸い込まれるような錯覚に、ワカシャモは陥っていた。慌てて首を横に振るワカシャモ。

「例え手足が動かなくたって……攻撃する方法ならある！　いけ、ルカリオ！」

　雅也の叫び声に鼓動するかのように、オレンジ色の光は一気に膨れ上がった。同時に、ルカリオは体の支えを失う。ついに繰り出されたワカシャモの蹴りは、その足先を光の玉に掠らせ、空を切っただけに終わる。

　その瞬間、ワカシャモは自分の敗北を悟った。

「はどーだんっ！」

　爆音が、森の中に轟いた。

　それから、どれだけの時間が経っただろうか。

「……負けた、ね」

　地面に落ちたワカシャモをボールに戻した神楽は、不意にそう呟いた。地面にへたり込むわけでもなく、ただ立ったまま、未だ手に持つダークボールをジッと見つめていた。

「神楽、教えてくくれない？　その……色々と……さ」

　既にルカリオをモンスターボールに戻し、腰のホルダーにセットした雅也は、首を傾けながら聞く。神楽とポケモンバトル出来たのは楽しかったのだが、いかんせん、雅也には分からないことが多すぎなのだ。彼としては、最低でも、何故忍者のような格好をしているのかだけでも教えてもらえると、スッキリ出来そうなのだが……聞いてしまった後で、雅也は首を横に振る。

「ううん。そこら辺は、明日でいいや」

「……ありがとう。そうしてもらえると助かるかな？　今は、しばらくこうしていたいんだ」

　それには何も言わず、雅也は河原の方へと踵を返す。それでも少し歩くと、立ち止まって振り返った。

　ふと、雅也は神楽と目が合う。

　振り返ったのだから当然なのだが、それでも二人は少し驚いた。深夜、月が照らす中、暫く黙って互いを見つめ合う。何を思い、何を感じているのか、それは二人にしか分からないことだ。

「……」

「……」

「……じゃあね」

　そんな声が、響いた。